ばんえい競馬の楽しみ方

帯広市単独開催による「ばんえい十勝」は、平成29年、10周年を迎えました。その間、ファンの裾野も広がり、これまで競馬に縁のなかった家族連れや若い世代を始め、道内外・国外からの観光客も訪れるようになりました。帯広競馬場は、今では観光スポットやイベント会場としても、新たな楽しみを生み出しています。

ばんえい競馬の最大の魅力は、間近で人馬を応援できること。接戦のレースでは、馬たちと並行して観客も一斉に走り、熱い声援を送る。ばんえい十勝でしか味わえない一体感がここにある。
(写真／山岸　伸)

ばんえい十勝の拠点帯広競馬場

帯広における競馬は明治三十年（一八九七年）秋、帯広町東三条十丁目で開催された草競馬が始まりとされています。明治四十四年（一九一一年）、現在の帯広市東四条九～十二丁目以東に、「十勝競馬場」が開場。昭和七年（一九三二年）に現在地に移転し、「帯広競馬場」と改称されました。全長二百メートルの直線コース、三階建てのスタンドを中心に、観光施設とかちむら、ふれあい動物園、馬の資料館などを併設。きゅう舎地区には、関係者とその家族を含む約二百名、馬約五百頭が暮らしています。

（写真／赤堀　正憲）

帯広競馬場

【所　在　地】
北海道帯広市西13条南9丁目
☎ 0155-34-0825
【敷地総面積】
400,371.98㎡
きゅう舎地区：59,063㎡
駐車場：17,637㎡（750台・無料）
スタンド：8,941.19㎡（4,641人収容）
【入　場　料】100円
【開 催 期 間】
4月中旬～翌年3月下旬の土・日・月曜
（※例外あり）
【所　有　者】十勝農業協同組合連合会
【管理運営者】帯広市
【開　　設】昭和7年8月8日

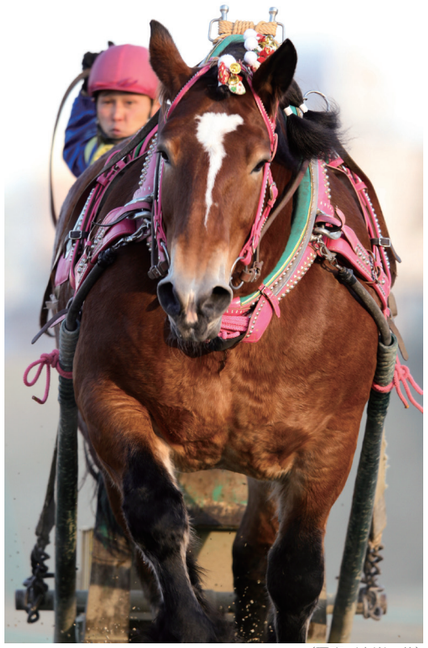
【アクセス】
自 動 車…帯広空港から約40分
芽室帯広ICから約15分
タクシー…帯広駅南口から約7分
十勝バス…帯広駅バスターミナル
12番乗り場から乗車
「競馬場」停留所下車
（所要約11分）

進化する「ばん馬」

ばんえい競馬七十年の歴史の中でばん馬は改良を重ねられ、充実した馬格を備えるようになりました。大きさはサラブレッドの約二倍、体重一トンを超える馬も少なくありません。

現代の主流は日本輓系（ばんけい）種

ばん馬のルーツは農耕馬として外国から輸入された大型馬。代表的な品種に、ペルシュロン種、ブルトン種、ベルジャン種があります。こうした純血種をもとにした交雑種は、かつてはどれも「半血」と呼ばれていましたが、平成十五年以降に生まれた馬は、純血種同士の混血に限り「半血」、それ以外の混血は「日本輓系種」と呼ばれています。現在の主流は、この日本輓系種、略して「日輓（にちばん）」。牽引力、登坂力、速力を追求し、ばんえい競馬のために生み出された日本独自の品種です。



（写真／山岸　伸）

ばん馬のルーツになった主な純血種

ペルシュロン種／略称「ペル」

フランス北西部のペルシュ地方原産。8世紀頃からフランスの重種馬にアラブ種などの血が入ったものとされ、品のある容姿が特徴です。力が強く、性格はおとなしく従順。毛色は芦毛や青毛が多く見られます。ばん馬の祖とされるイレネーや1億円達成馬キンタロー、フクイチもペルシュロン系です。

ブルトン種／略称「ブル」

フランス西部のブルターニュ半島原産。肉付きがよく頑丈でスタミナがあり、日本には戦後、アングロノルマンに替わって輸入されるようになりました。毛色は栗毛、鹿毛などで、青毛は存在しません。足先に生える距毛（きょもう）が長く多いのが特徴。1億円達成馬では、タカラフジがブルトン系です。

ベルジャン種／略称「ベルジ」

ベルギーのブラバント地方原産。アメリカで人気があり、日本にもたらされたのもアメリカで農耕馬として品種改良されたベルジャン種です。首が太く、がっしりとした体格ながらスピードがあるのが特徴。栗毛が多く見られます。1億円達成馬では、マルゼンバージがベルジャン系です。

馬を見分けるポイント

レースに出る馬は、出走前に必ず実馬照合（個体識別）を受けます。識別のポイントとなるのは、主に次の四項目です。

毛　色

ばん馬の代表的な毛色は、鹿毛、栗毛、青毛、芦毛の四種類。まれに、地色に白い毛がまじる粕毛（かすげ）、まだら模様のブチ毛もいる。

つむじ

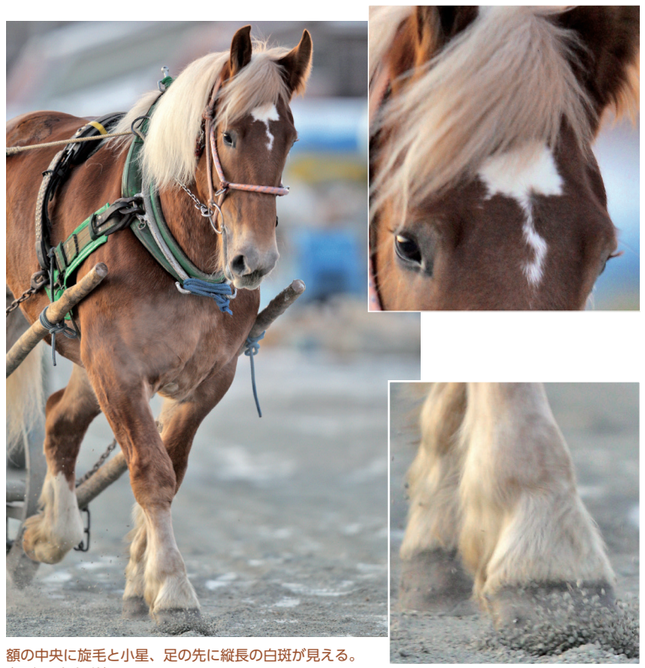
馬の毛が渦を巻いている部分を「旋毛」といい、人の「つむじ」にあたる。馬の場合はこの旋毛が額や胸など体のあちこちにあり、体のどこに幾つあるかは生涯変わらない馬の特徴のひとつとなる。

顔の模様

顔のどこにどんな白斑があるかを見る。例えば額にある白斑は「星」と呼ばれ、大きさや形により「大星」「小星」「流星」などに分かれる。

足の模様

左右前後のどの足にどんな白斑があるかによって判別する。



額の中央に旋毛と小星、足の先に縦長の白斑が見える。
（写真／山岸 伸）

主な毛色の種類

鹿毛（かげ）

馬体は赤褐色で、たてがみ、尾、脚の下部が黒い。毛色が黒に近く、一部が褐色のものは青鹿毛、黒鹿毛に分かれる。

栗毛（くりげ）

たてがみ、尾も含めて全身の毛が黄褐色。色の濃淡はさまざまあり、栃の実のような濃褐色のものは栃栗毛と呼ばれる。

青毛（あおげ）

全身の毛が黒。サラブレッドには少なく、ペルシュロンに多く見られる毛色。冬には毛先が褐色に見えることもある。

芦毛（あしげ）

全体に白い毛があり、若い時は黒っぽく、年齢とともに白くなる。黒白のまだら模様のように見える馬もいる。

ばんえい熱闘の舞台 コースの概要と見どころ

世界で唯一、帯広競馬場だけで開催されているばんえい競馬。舞台となるコースも歴史とともに変化し、世界に類を見ない独自のものになりました。

直線二百メートルのセパレートコース

普通の平地競馬は芝かダート（砂）のオープンコース※で行われますが、ばんえい競馬はふたつの障害がある直線二百メートルのダートコース、それも一頭あたり幅一・八メートルのセパレートコース※で競われます。

ばんえい競走馬は重量物を載せたそりをひき、このコースを駆け、登り、時に止まりながらゴールを目指します。

※オープンコース／各馬の走路が規定されていないコース。
※セパレートコース／各馬の走路が決められているコース。他の走路を侵すと失格となる場合がある。

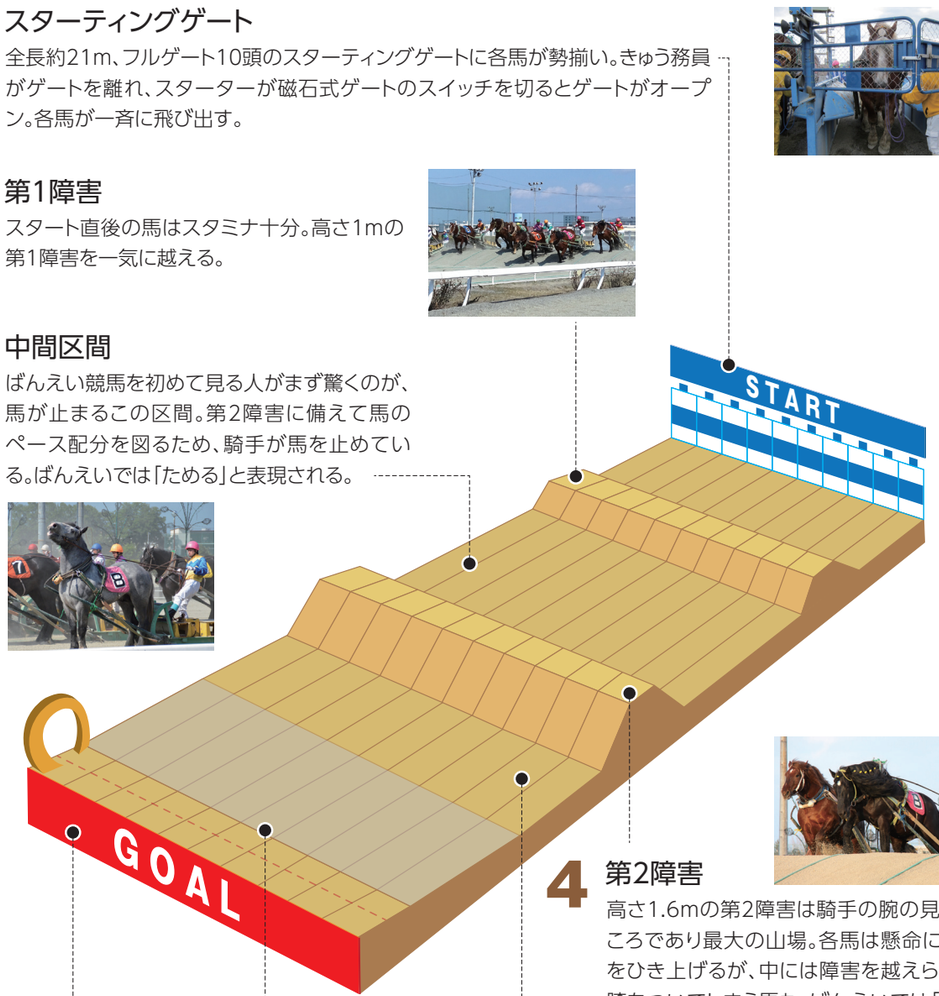
年度ごとに走路の砂を一新

コースに使われている砂は十勝川上流の岩を砕いた「ビリ砂」。レースを繰り返すと砂は摩耗し、そりが滑りやすくなってタイムに影響します。晴天時には砂けむりが舞って視界を遮ることも。そのため年度終了ごとに砂の入れ替え作業を行っています。

ヒーティング完備で通年開催

帯広競馬場の本走路にはヒーティングシステムが完備され、冬季も凍結することなくレースが開催されています。ヒーティングが導入されたのは平成六年のこと。ばんえい競馬がまだ四市で開催されていた当時、正月もレースを開催したいという要望が高まり、降雪量の少ない帯広だけに設置されました。

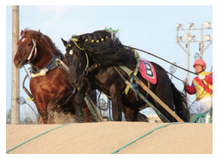
コース下の地中にパイプが埋められ、電光掲示板の裏手にあるボイラー室で不凍液を温めてパイプ内に循環させています。



1 スターティングゲート
全長約21m、フルゲート10頭のスターティングゲートに各馬が勢揃い。きゅう務員がゲートを離れ、スターターが磁石式ゲートのスイッチを切るとゲートがオープン。各馬が一斉に飛び出す。

2 第1障害
スタート直後の馬はスタミナ十分。高さ1mの第1障害を一気に越える。

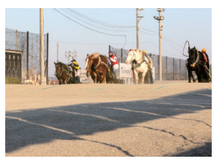
3 中間区間
ばんえい競馬を初めて見る人がまず驚くのが、馬が止まるこの区間。第2障害に備えて馬のペース配分を図るため、騎手が馬を止めている。ばんえいでは「ためる」と表現される。

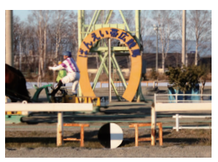


4 第2障害
高さ1.6mの第2障害は騎手の腕の見せどころであり最大の山場。各馬は懸命にそりをひき上げるが、中には障害を越えられず膝をついてしまう馬も。ばんえいでは「膝を折る」と表現される。見守るファンから最も熱い声援が上がるのがこの場面。

5 後半区間
第2障害を越えた後、騎手は馬を止めることはできない。しばしば波乱が起こるのがこの区間。真っ先に第2障害を越えた馬が、スタミナ切れで止まってしまい、後続馬がトップに踊り出ることも。

6 砂障害
ゴール前には最後の難関、高さ0.5mの上り勾配がついた砂障害が待ち構え、より白熱したレースを演出する。この砂障害は、冬季は走路凍結防止のため撤去される。





7 ゴール
ばんえいでは、そりの後端がゴールラインを通過した時点でゴールと認定する。ゴール間際で先頭の馬が止まってしまうこともあり、最後まで目が離せない。

レースの流れと舞台裏

ばんえい競馬開催日には、一日約十一のレースが三十から四十分間隔で行われます。レースの手順は厳格に決められており、流れるように進行します。

馬場入場までの騎手と馬の動き

騎手はレース前日夜から当日朝まで、体調管理と情報遮断のため調整ルームで過ごします。一方、出走馬の準備が始まるのは発走二時間前から。きゅう務員は担当馬に念入りにブラシをかけ、たてがみを飾ります。発走五十分前までには馬体重を測定して装鞍所に入り、実馬照合（馬の特徴をデータと照合）や健康検査、装具の点検を受けます。発走三十分前までにはパドックに集合。騎手は鞍もあぶみもなしに颯爽と馬に騎乗して周回し、各馬は番号順にパドックを出て馬場に入場します。

円滑なレースを支える舞台裏の流れ作業

馬はスターティングゲート後方にある待機馬房へ、騎手は騎手控え室でレース開始まで待機します。この間に舞台裏では、馬場入場を合図に専任スタッフが走路に入り、前のレースで荒れた馬場を手際よく整備。スタート担当者は各馬のそりに重量物を積み込んで配列します。騎手が手綱、胴引き、かじ棒を結束し、馬とそりをつないだらゲートイン。ばんえい競馬はそりの後端が基準なので、スタート担当者がそりの後ろをそろえます。その間にスターターが騎手の帽色と番号、係員がそり重量などをチェック、準備が整ったらスタート台に立って旗を振り、磁石式ゲートのスイッチを切ってレースをスタートさせます。

ゴール後は、ゴール担当者が速やかにそりを外し、トロッコでスタート地点に戻します。着順判定が出たら、一・二着の馬は禁止薬物に関する検査のため検体所へ。こうした一連の作業が、レース毎に滞ることなく繰り返されています。

受け継がれる伝統 ばんえいの競走用具

ばんえい競馬は、使用される用具が多いのも特徴のひとつ。中でも伝統の技が生み出した美しい馬具は、レースに彩りを添えています。

三種類からなる競走用具

ばんえい競馬の競走用具は、開拓時代から農耕馬や荷役馬に使用されてきた馬具がもとになっています。普通の競馬に比べて用具の種類が多く、大きく分けると、馬を操作するための「馭具」、そりをひくための「ひき具」、馬にひかせる「そりと重量物」の三種類があります。

このうち馭具やひき具は、彩色や鋲打ちが施され、伝統工芸品としても注目すべきもの。かつては老練の馬具職人たちによって、それぞれの馬の肌にぴったり合うよう作られてきましたが、近年はこの馬具製造技術が途絶え、手持ちの馬具が大切に受け継がれています。

馬を操る「馭具（ぎょぐ）」

馬を操る馭具はばんえいに限らず、普通の競馬や乗馬にも共通するものです。馬の口にくわえさせるハミ、ハミを保持するための頭絡（とうらく）、ハミと結ばれて騎手の手に握られる手綱があります。ばんえいの騎手が用いる手綱は「馭者手綱」と呼ばれ、長さ七・五メートル。騎手はハミに接続したこの手綱だけを使って、前進、停止、走れ、などの指示を馬に伝えます。

頭絡とハミ。

そりをひくための「ひき具」

馬にそりをひかせるための「ひき具」は種類が多く、複雑に結びついています。何百キロもの重量をひく馬に、なるべく負担をかけずに最大限の力を発揮させるため、さまざまな工夫がなされています。

ばん馬は肩でそりをひくため、肩に一番、加重が掛かります。この部分に装着するのが二本の鋼鉄でできた「わらび型」と、わらび型が直に皮膚に当たらないよう保護するための「がら」。そりと馬を連結するのは「胴引き」です。わらび型と胴引を結ぶ革製の「よび出し」「背づり」「つり革」は、主に加重を緩衝する役割を担っています。また、そりに付属する「引木」、通称「どっこい」は、馬が左右に動いてもそりが真っすぐ進むよう調整しています。

馬とそりを結ぶものには、胴引きのほかに「かじ棒」と呼ばれるグラスファイバー製の棒があります。これは文字通り、そりの方向を決めるかじの役目を果たすとともに、馬が後退するのを制限する役も担います。この歯止めの役割は、ことに障害を越える際に重要です。

わらび型とがら、背づりなど。

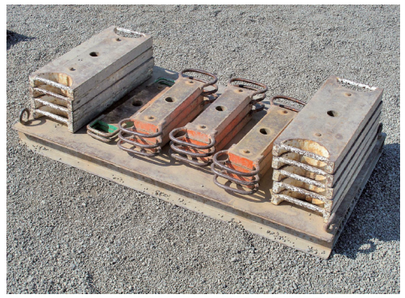
そりと重量物

ばんえい用のそりは、鋼鉄製で重さ四五〇キロ。そりの上には「箱型重量物」と呼ばれる鉄箱が四つ固定されていて、この中に規定の重量物を収納します。重量物は鉄製の板状で、中央に穴があり、ここに箱の中に立つボルトを差し込んで固定します。重量物は、五、十、三十、五十キロの四種類。これらを組み合わせて重量を調整します。

ばんえい競馬では、馬の年齢や成績などによってひく重さが決まり、これを「ばんえい重量」といいます。そりの重さは一律四五〇キロで、ばんえい重量六〇〇キロの馬なら、一五〇キロ分の重量物を積んだそりをひくことになります。また、そりの後端は三角形に張り出しており、その尖端がゴールを決する最後端です。

騎手重量を調整するためのウェイト。

ウェイトを収納する「重量かばん」。アルミの弁当箱に似ているため愛称で「弁当箱」と呼ばれている。騎手は各自の弁当箱をもって検量を受ける。


5kg、10kg、30kg、50kgと、4種類の板状の重量物を組み合わせる。

そりの上にある4つの箱型重量物のうち、1番前と後部2つの箱に重量物を分散して収納。前から2番目の箱には、騎手重量を調整するための重量かばん、通称「弁当箱」を収納する。

ばんえい競馬の華 騎手のテクニック

馬は本来、神経質な生き物。その馬を操り、いかに良いレースをさせるかは、騎手の腕の見せどころです。

高度な技術を持つばんえい騎手

騎手が馬をコントロールする手綱は、馬が口にくわえたハミと結ばれており、騎手は手綱を微妙に操作しハミを通じて馬に意志を伝えます。人馬が密着している普通の競馬と違い、ばんえいの騎手はハミから約三メートルも離れたそりの上から、手綱一本で指示を出さなければなりません。それだけに極めて高度な技術が要求されます。

騎手は「馬の耳」を見る

レース時に騎手が注視するのは馬の耳。やる気のある馬は耳をしっかり前に向け、騎手が声をかけると即座に耳を後ろに向けます。この状態であれば、馬は指示に素早く反応します。例えば「行け」という指示にすぐさま反応するかどうか、騎手は馬の耳を見ながら、指示を出すタイミングを見極めます。

スタートは勝負の要

騎手が最も緊張するのはスタートの瞬間。出遅れるとすぐに二～三メートルの差がついてしまいます。一メートルの差は一秒の遅れ。この差を前半のうちに詰めようとすると、馬に無理を強いて後半のスタミナに影響します。

そのため騎手はゲートインすると馬の耳を見て、馬と呼吸を合わせます。ゲートが開く瞬間、一気に、ば（追）ってスタートダッシュ。そのまま「馬なり（馬が走るに任せること）」で第一障害を越えます。

騎手が最も緊張するスタートの瞬間。

第二障害前の頭脳戦

第二障害前の駆け引きは、ばんえい競馬の見どころのひとつ。騎手は自馬の長所・欠点を考慮し、事前にレースを組み立てています。逃げる（先頭を走る）タイプの馬なら、どう逃げ切るか。追い込み型ならどこで仕かけるか。レース展開を読みながら、自馬の位置取りや、馬を止めるタイミングを図ります。

それでも思い通りにいくとは限らないのがレースの妙味。騎手は第一障害を降りた時点で、その日の馬の状態をほぼ見極めているといいます。調子がいい馬ならどんどん行かせ、百パーセントの状態でないなら障害で遅れを取り返すなど、瞬時に作戦を切り替える判断力と経験が物を言います。

第二障害はこう越える

騎手は、第二障害の下、馬の歩幅で一、二歩手前で馬を止めます。そして馬の呼吸を読み、力いっぱい手綱を引いてバイキ（馬を後退させること）し、その反動で馬を障害に追い上げます。バネをしめてポンと離す要領で、体重の三倍はあるという馬の瞬間的な牽引力を引き出すのです。

この時、馬が跳ねるように飛び出さないよう一歩一歩、着実に登らせたほうがこらえが効くもの。理想は一度も止まらずに障害の上まで登ること。これを「ひと腰」と言います。しかし、中には重さを嫌がり、登坂途中によじれる（馬体が左右に曲がる）馬も。ここで騎手の手綱さばきが問われます。ハミを左右に切り返して馬体を立て直し、声をかけて馬を集中させ、再度、バイキして登坂に挑みます。前足が障害の上に掛かれば馬は自然に頑張り、二腰か三腰でそりを持ち上げれば、あとは一気に滑り降ります。

人馬の息を合わせて第2障害を登る。崩れた馬を立て直すのも騎手の腕の見せどころ。

ゴール手前の猛追

第二障害を真っ先に降りた馬の後を、後続の馬たちが追います。ここで騎手が注目するのは前を行く馬の脚。途中で息切れする馬が出ます。トップの馬が突然停止することも。この機を逃さず、手綱によるべん打ちで馬をぼ（追）います。

反対に自馬が止まったら、すかさずバイキします。これが時に観客からは、騎手が馬を止めているように見えるのですが、実際はその逆。馬が止まりそうになるのを見定め、瞬時に下げて進ませているのです。馬が完全に止まってからでは遅いので、一瞬の判断でタイムを縮めます。

ばんえいの勝負はラスト五メートル。それまで無理をさせないよう、騎手は馬のスタミナ配分を計算していますが、それはどの騎手も同じ。最後はどの人馬も限界まで力を出し切ります。先頭の馬がゴール直前で捕まり、後続馬との混戦になる理由がここにあります。

「べん打ち」の誤解

しばしば「馬が可哀そう」と批判されるのが騎手のべん（鞭）打ちですが、ばんえい競馬で用いられるのは鞭ではなく、長い手綱の余った部分。体重一トンの馬にとって手綱で打たれるのは、人間でいえば肩をポンと叩かれるのと同程度の刺激。騎手はべん打ちによって「頑張れ」と馬に気合いを入れているのです。

どの位置につけ、いつ馬を止めるか。騎手の頭脳戦が展開される第1障害と第2障害の中間点。写真は平成28年3月20日開催のばんえい記念。

一喜一憂の楽しみ
ばんえい競馬の勝馬予想

勝馬予想が難しいと言われるばんえい競馬。速さだけを競う平地競馬と違い、さまざまな要素からレース展開を読み解くことが最大の面白さです。

予想の難しさが面白さ

ばんえい競馬は、平地競馬に比べてレース予想が難しいと言われます。重賞競走で勝った実力馬でも優勝を重ねることは難しく、大本命とされたレースで苦戦することもしばしば。

平地競馬では、騎手の力が占める割合は三割、馬の実力が七割と言われるのに対し、ばんえい競馬は騎手七割、馬三割とも言われます。そのため、ノーマークの馬が騎手の手綱さばきで善戦し、予想外の大穴が出ることも珍しくありません。この予想の難しさこそがばんえい競馬の面白さでもあり、奥深さでもあります。

入口では、ばんえい十勝版専門誌を販売している。

レースを左右する馬場水分

ばんえい競馬のレース展開は、平地競馬以上に馬場の状態に大きく影響されます。この馬場状態を表すのが「馬場水分」です。

雨や雪が降り、馬場に含まれる水分量が多いとそりがよく滑り、好タイムを出しやすくなります。この馬場の状態を「軽馬場（かるばば）」と呼びます。反対に好天続きで馬場が乾燥していると、そりの抵抗が増してタイムが遅くなります。これを「重馬場（おもばば）」と言います。

この馬場水分の違いは、レースのタイムに如実に表れます。ばんえい競馬の標準タイムは約一分四十秒とされていますが、積雪でそりがよく滑ると一分を切ることもあります。反対に好天では、三分以上かかることもあります。この違いがレースの行方を左右します。一般に軽馬場では先行して逃げ切る馬が、重馬場では後半の追い上げに強い馬が有利とされています。馬場水分は勝馬を予想するうえで欠かせない要素。競馬専門紙に各馬の「水分別成績」が掲載されているのもそのためです。

ハンデもレースを面白くする

レース予想のもうひとつのポイントは、馬がひく重量です。ばんえい競走馬は、馬齢と通算収得賞金によって格付け（クラス分け）されています。各馬がひく重量（ばんえい重量）はこの格付けに応じて決められており、開催回を重ねるとその重量は増えていきます（表参照）。好成績を上げて格付けが上がった馬は、重量も増えます。さらに重賞競走の場合、各馬の収得賞金額に応じて重量が加増されるレースもあります。つまり、強い馬ほど負担重量が重くなるのです。

反対に、牝馬は二十キロ、二歳及び三歳のせん馬は十キロ、重量が軽減されるというハンデがあります。騎手重量についても規定は七十七キロですが、女性騎手はキャリアによって十キロまたは二十キロ、男性騎手も新人時代は十キロ減量されるので、馬の負担がそれだけ軽くなります。こうしたハンデは実力差を調整し、白熱したレースを演出するためのものですが、同時に予想を難しくもしています。

重量の差は、とりわけ第二障害の登板に影響します。馬がひくそりは平坦地では実重量より軽くなり、障害を登る時は五割以上も重くなるというデータがあります。例えば、ばんえい重量六百キロでも、そこに騎手重量が加わると、障害を登る時には一トン前後の加重が掛かることになるのです。重量がより軽い馬のほうが有利なのか、重いハンデ重量を負っても実力を発揮できる馬が勝つのか。ハンデを考慮して予想するのも、ばんえいならではの面白さです。

波乱が高配当を生むことも

このように、馬、騎手、馬場状態、重量などが複雑に絡み合ってレースが展開されるばんえい競馬。予想が的中しにくく高配当になることもあります。例えば重量が軽減される牝馬に新人騎手が乗り、水分量多めの軽馬場で並みいる強豪をかわし、逃げ切って優勝ということも起こり得ます。

速さを競うだけではない障害レースなので、さまざまな要素を読み解き、大穴を狙うのも楽しみのうち。当てるのが難しい三連単は高配当になりやすく、ファンの人気を集めています。

ばんえい十勝の勝馬投票券の種類

ばんえい十勝の勝馬投票券（馬券）は、比較的当たりやすい複勝から、高配当が期待される三連単まで8種類。加えて、インターネット限定販売の5重勝・7重勝単勝式があります。

☆単　勝（単勝式）
1着に入る馬1頭を当てる。
☆複　勝（複勝式）
3着までに入る馬1頭を当てる。
（出走頭数が7頭以下の場合は2着まで）
☆枠　複（枠番連勝複式）
1着と2着に入る馬2頭の枠番号の組み合わせを当てる。
☆馬　複（馬番連勝複式）
1着と2着に入る馬2頭の馬番号の組み合わせを当てる。
☆馬　単（馬番連勝単式）
1着と2着に入る馬2頭の馬番号を着順通りに当てる。
☆ワイド（拡大馬番連勝複式）
3着までに入る馬2頭の組み合わせを当てる。
☆三連複（三連勝複式）
3着までに入る馬3頭の組み合わせを当てる。
☆三連単（三連勝単式）
3着までに入る馬3頭の馬番号を着順通りに当てる。
☆5重勝単勝式
指定5レースの1着に入る馬すべてを当てる。
☆7重勝単勝式
指定7レースの1着に入る馬すべてを当てる。

普通競走のばんえい重量（平成28年度）

○5歳以上及び3・4歳で通算収得賞金70万円以上の馬

重量区分	オープン	A 1	A 2	B 1	B 2	B 3	B 4
	400万円以上	400万円未満	300万円未満	240万円未満	180万円未満	140万円未満	100万円未満
第1回～第3回	660kg	650kg	640kg	630kg	620kg	610kg	600kg
第4回～第6回	670kg	660kg	650kg	640kg	630kg	620kg	610kg
第7回～第8回	680kg	670kg	660kg	650kg	640kg	630kg	620kg
第9回～第10回	680kg	670kg	660kg	650kg	640kg	630kg	620kg
第11回～第12回	690kg	680kg	670kg	660kg	650kg	640kg	630kg
第13回～第15回	700kg	690kg	680kg	670kg	660kg	650kg	640kg
第16回～第18回	710kg	700kg	690kg	680kg	670kg	660kg	650kg
第19回～第21回	720kg	710kg	700kg	690kg	680kg	670kg	660kg
第22回～第24回	730kg	720kg	710kg	700kg	690kg	680kg	670kg
第25回～第26回	740kg	730kg	720kg	710kg	700kg	690kg	680kg

○3・4歳で通算収得賞金70万円未満の馬

C 1	C 2
70万円未満	30万円未満
580kg	570kg
590kg	580kg
600kg	590kg
610kg	600kg
620kg	610kg
630kg	620kg
640kg	630kg
650kg	640kg
660kg	650kg
670kg	660kg

※2歳馬については別基準

ばんえい十勝の重賞競走

ばんえい十勝のレースには、一般競走、特別競走、重賞競走の3種類があります。重賞競走は、賞金額が高い重要なレースで、各条件ごとの選抜馬がしのぎを削ります。

※ BGは「ばんえいグレード」の略。最もグレードが高いのが「BG1」。
※ 競走及び実施日は各年度ごとに決められます。

4歳路線

BG3	柏林賞	7月初旬
4歳重賞3冠路線の第1弾		

BG2	銀河賞	9月下旬
4歳重賞3冠路線の第2弾		

BG3	クインカップ（牝馬限定）	11月中旬
4歳女王の座を賭けた一戦		

BG1	天馬賞	1月3日
5歳の王者決定戦		

3歳路線

BG3	ばんえい大賞典	7月下旬
3歳重賞3冠路線の第1弾		

BG3	はまなす賞	8月下旬
3歳・4歳オープンの世代交流戦		

BG2	ばんえい菊花賞	11月初旬
3歳重賞3冠路線の第2弾		

BG1	ばんえいオークス（牝馬限定）	12月初旬
3歳最強の牝馬決定戦		

BG1	ばんえいダービー	12月下旬
3歳重賞3冠路線、最後の大一番		

BG3	ポプラ賞	3月中旬
4歳・5歳の世代交流戦		

馬の年齢

馬の年齢は、実際の誕生日ではなく元日を基準にして数えます。生まれた年は「当歳」、翌年の元日にどの馬も「1歳」になります。2歳でデビューした新馬も年が明けると3歳になるので、こちらは「明け3歳」とも呼びます。

2歳路線

BG3	ナナカマド賞	10月中旬
その年デビューした新馬が挑む初の重賞競走		

BG2	ヤングチャンピオンシップ	12月下旬
産地別対抗「ばんえい甲子園」の決勝戦		

BG2	黒ユリ賞（牝馬限定）	2月中旬
帯広市の花、黒ユリを賞した女王決戦		

BG1	イレネー記念	3月初旬
新馬の頂点を決める伝統のレース		

古馬路線

※古馬：その年デビューする「新馬」に対し、レース経験のある馬のこと。

BG2	ばんえい十勝オッズパーク杯	4月下旬
前年度獲得賞金による選抜馬が集結		

BG3	旭川記念	6月中旬
3歳以上オープン、4市記念競走第1弾		

BG3	北斗賞	7月中旬
3歳以上オープン、ばんえいグランプリへの前哨戦		

BG1	ばんえいグランプリ	お盆
3歳以上オープン、ファン人気投票レース		

BG2	岩見沢記念	9月中旬
3歳以上オープン、4市記念競走第2弾		

BG2	北見記念	10月下旬
3歳以上オープン、4市記念競走第3弾		

BG3	ドリームエイジカップ	11月下旬
4歳以上、世代別選抜馬が対決		

BG1	帯広記念	1月2日
4歳以上オープン、4市記念競走最後の大一番		

BG2	ヒロインズカップ（牝馬限定）	1月下旬
4歳以上牝馬オープン、女王決定戦		

BG2	チャンピオンカップ（重賞優勝馬限定）	2月中旬
4歳以上、今年度の重賞優勝馬が結集		

BG1	ばんえい記念	3月中旬
4歳以上オープン、最大1トンをひく最高峰レース		

場外発売所一覧

ばんえい競馬の場外発売は、昭和59年に旭川、帯広、北見、岩見沢の4市の競馬場で相互場外発売が開始されたのが始まりです。現在、ばんえい十勝で開催されるレースの勝馬投票券は、帯広競馬場のほか、以下の場外発売所で取り扱っています。

直営場外発売所

旭川北彩都場外発売所（レラスポット北彩都）
旭川市南6条通20丁目1978－17　☎0166－39－2400

北見場外発売所（ミントスポット北見）
北見市小泉408－1　☎0157－24－7911

岩見沢場外発売所（ハロンズ岩見沢）
岩見沢市6条西2丁目　☎0126－22－8611

釧路場外発売所（ハロンズ釧路）
釧路市若松町2番13号　☎0154－23－2311

名寄場外発売所（ハロンズ名寄）
名寄市西1条南8丁目1－1　☎01654－9－4008

網走場外発売所（アプスポット網走）
網走市南4条東1丁目1番3号APTマツブンビル1階・2階　☎0152－68－2001

琴似駅前場外発売所
札幌市西区琴似2条1丁目3 琴似Lビル2階・3階　☎011－633－1333

深川場外発売所（イルムふかがわ）
深川市3条22番26号　☎0164－34－6400

場外発売所

Aiba小樽	☎0134－31－5320
Aiba中標津	☎01537－9－8007
Aiba千歳	☎0123－40－9000
Aiba江別	☎011－391－8600
Aiba滝川	☎0125－24－9521
Aiba石狩	☎0133－64－0816
Aiba札幌中央	☎011－522－2278
Aiba函館港町	☎0138－44－4800
Aiba登別室蘭	☎0143－83－6887
Aiba苫小牧	☎0144－38－0620
Aiba静内	☎01464－2－8900
Aiba浦河	☎01462－4－4507

道外発売所

BAOO高崎	☎027－322－5192
BAOO東広島	☎082－420－7800
BAOO宇部	☎0836－59－0200
BAOO鳥取岩美	☎0857－37－5800
BAOO三刀屋	☎0854－45－0077
BAOO天文館	☎099－216－3355
BAOO荒尾	☎0968－62－2466
BAOO博多	☎092－291－2800
大井競馬場ふるさとコーナー	☎03－3763－2151

誰でも参加できる！ばんえい十勝の名物企画

レースの舞台裏探訪 バックヤードツアー

ばんえい十勝はレースだけではなく、誰もが気軽に参加できる多彩な企画を実施しています。レースの裏側を案内するバックヤードツアーは、帯広単独開催初年度の平成十九年、団体を対象として始まり、翌年から個人参加も受け付けるようになりました。

ツアーは競馬開催日に実施され、約四十五分。参加者は出走前の馬が集まる装鞍所を見学し、バスできゅう舎地区を巡り、本走路を見渡す旧実況室からレースを観戦します。普段は関係者しか立ち入れない舞台裏が見学できるため、道外からの観光客の利用も多く、今では年間七千人以上もの参加者を集めています。

※料金／大人五百円（おみやげ付き）、小学生以下無料

装鞍所を見学する参加者たち。

専用バスに乗り、きゅう舎地区を見学。

場内のモニターに協賛レースの名が表示される。

協賛者には優勝騎手のサインが贈呈される。

協賛者とその同行者は、優勝馬と一緒に記念撮影できる特典付き。

冠レースで思い出づくり 協賛レース

ばんえい十勝では、法人はもとより、個人の方からも協賛レースの申し込みを受け付けています。誕生日や結婚記念日、卒業や栄転のお祝いなど、これまでさまざまな冠レースが開催されてきました。

レース当日は、出走表や競馬予想新聞などに協賛者自身がつけたレース名が掲載されます。また勝馬投票券にもレース名が印字されるため、全出走馬の単勝馬券を記念に買い求める方も多いそう。協賛者は表彰式でプレゼンターを務めたり優勝馬や騎手と記念撮影もできて、よい思い出になると好評です。尚、協賛金の九割は副賞として優勝馬の関係者に贈られ、一割はばんえい競馬の振興運営費に充てられています。

人間ばん馬で盛り上がる とかちばん馬まつり

帯広競馬場が一番盛り上がるイベントといえば「ばん馬と共に地域振興をはかる会（事務局：帯広商工会議所）」の主催で、毎年十月に開かれる「とかちばん馬まつり」。こちらも帯広単独開催が決まった平成十九年に始まり、以来、毎年恒例となりました。

会期中は多彩なアトラクションが目白押し。中でも馬ならぬ人間が六人一組で挑む「ワールド人間ばん馬チャンピオンシップ」と、女性ランナーが本走路を疾走する「人間ダービーヒロインズカップ」は、道内外から集まった挑戦者たちが熱戦を繰り広げ、会場を大いに沸かせます。二日間に渡って開催されるばん馬まつりは、今では全道・全国から二万五千人が集まる一大イベントに成長しました。

力自慢が競う名物イベント人間ばん馬。

人間ダービーヒロインズカップ。

平成27年の初日の夜には道新花火大会も催された。

※写真はいずれも平成27年度の様子。

市民や観光客を集める 四季折々のイベント

帯広競馬場ではほかにも年間を通してさまざまなイベントが催されています。四月の開幕イベントに始まり、ゴールデンウィークや夏休みのファミリー向けイベント、夏の十勝ビアガーデン、お正月の特別イベント、帯広氷まつりと連動したばん馬冬まつりなど趣向を凝らした四季折々の催しが目白押し。また中央競馬のトップジョッキーを招いて開かれる「JRAジョッキーDAY」も、平成十九年以来の恒例イベントです。

こうした機会により、同競馬場には幅広い世代の市民や観光客が足を運ぶようになり、今では帯広のイベント会場としても重要な役割を担っています。

開幕初日のお客様をジョッキーたちがお出迎え。

ばんえい十勝10年目を迎えた平成28年度の開幕パレード。

「JRAジョッキーDAY」では中央競馬の騎手たちがばんえいレースに挑戦。

厳寒の光景が人気を呼ぶ朝調教ツアー

早朝のトレーニングを一般公開する朝調教ツアーは、開始以来、熱心なばんえいファンや写真愛好家の間で根強い人気を得ています。

早朝の凛と澄んだ空気の中、レースに備えて黙々とトレーニングに打ち込む人馬たち。ばんえい競馬をテーマにした映画『雪に願うこと』で、ばん馬の力強さと美しさを強く印象づけたのも、この早朝の調教シーンでした。

平成二十二年十月、トレーニング風景を見学できる朝調教ツアーがスタート。春夏秋は重賞競走開催日に、冬は毎週日曜日に実施されています。

冬の朝調教ツアーでは、氷点下の冷気の中、馬体からたちのぼる湯気と勢いよく吐き出される白い鼻息。メインスタンド脇から昇る朝日を浴びて幻想的に浮かび上がる人馬のシルエット…。厳寒期ならではの光景を前に、参加者たちは寒さを忘れてシャッターを切ります。参加者の中には道外からこのツアーのために訪れる人や、何度も通い詰める人もいるほど。平成二十八年度には延べ五百四十人が参加しました。

※料金／大人二千円、小・中学生五百円、小学生未満無料（プレミアムラウンジ利用券、おみやげ付き）

（写真／山岸　伸）

（写真／山岸　伸）